

# オストロム氏、ノーベル経済学賞の意味

## 学問を抽象から生活に

ノーベル経済学賞が、米国インディアナ大学のエリノア・オストロム教授に贈られることが決まった。在外初となる理由で注目された彼女は、政府の規制から半ば独立したコモンズと呼ばれる共有資源のガバナンス研究を積み重ねてきた政治学者である。異なる専門分野の功績に、あえて経済学賞が与えられた意匠を考えてみたい。

### 現場から撰る

「みんなの資源」は「世の

資源でもない」と思はされたが、あなたも、過剰に採取されてしまうことが多い。これは「コモンズの悲劇」と呼ばれ、不法投棄がやまない空き地から温暖化の進む大空に至るまで、環境問題の場々、頻りに想起されてきた。「悲劇」を避けるには、政府が課税や補助金などの手段で規制をかけるか、共有資源を個人に分割して私有化し、市場に任せるのが定説であった。彼が落



E・オストロムさん。政治学賞と経済学賞を受賞した点も注目

ちていったのは地域の「ミニミニ」ティーによる自発的管理といふ選択である。1980年代に出されたオストロムの名著「コモンズの統治 (Governing the Commons)」は、スリランカやフィリピンへの滞在、カナダの漁場、米国の地下水資源などを事例に、世界各地「長い間」を乗り越えてきたコモンズの存在を明らかにする。多くの地域社会は、政府の力に頼ることなく独自の工夫で資源を守ってきた。

日本の例も紹介されている。山中湖湖底の入会では入止してよい期間、使つてよい漁具、採取してよい産物に集落単位で自己規制をかけ、反別者には厳しい罰則を課すことで森林を持続させてきた。オストロムは、画一的なモデルを現場に当てはめるのではなく、現場の駆け引きから生まれた成功の事例を拾い集

佐藤 仁  
東京大准教授  
(資源政策論)



さとう・じん 88年生まれ。東京大大学院博士課程修了。著書に「稀少資源のポリティクス」(東京大学出版会)、「人々の資源」(明石書店)など。

め、そこに共通する原理原則を見いだそうと努めた。

従来の経済学は市場と価格メカニズムの分析に偏りがちで、経済学者の多くは「市場の失敗」を後付け的に説明してきた。だが、現場の実践から争いがどこに熱心であったわけではない。オストロムが着目したのは、この「現場」だ。資源のそばに暮らす人々の工夫に成功の秘密を見いだそうとしたのである。

### 他分野に示唆

オストロムは、今回のように一人のノーベル経済学賞受賞者、制度派経済学の視点による企業行動分析で高名なカリフォルニア大学のオリバー・ワイリアムソン教授とともに、抽象の世界に留まりがちな学問を生活の現場に引き戻すことで、学問そのものが豊かになれる可能性を提示した。事例に登場する人々の多くはノーベル賞という言葉さえ知らず、黙々と身の回りの天然資源を管理してきた。試行錯誤の歴史を紡いできた現場の民こそ、今回の共同受賞者といつてもよい。

### 懐深かった財団

筆者がオストロム教授を知り始めたのは、55年の国際コモンズ学会の場であった。「コモンズ」は、いまや人類学や社会学者なども巻き込む一つの学際的な領域として活況を呈しつつある。学会や専門誌だけでなく、日本国内の森林や漁業資源をめぐる慣習に関心をもつ若い研究者も増え、地元の方々との交流も生まれている。分野の垣根がこたわらなかつたノーベル財団の懐の深さに驚きつつあったのは筆者だけではない。

どのような条件が整うと人々は資源の保全に向けて協力をするのか。彼女が、公共選択論の權威で天のヴァンセント・オストロム氏と共に、この問題を考えはじめたのは60年代だ。やがて森林や牧草地などを、市場に支配される経済財として切り離すよりも、資源として継承する方が人々の行動を導く近道になると気づく。ある資源を管理しようとするとき、人々がやる気を出さぬのは、価格だけでなく、別の資源の入手可能性や資源の分配をめぐるコミニティーの歴史に規定されるからである。

オストロムは、今回のように一人のノーベル経済学賞受賞者、制度派経済学の視点による企業行動分析で高名なカリフォルニア大学のオリバー・ワイリアムソン教授とともに、抽象の世界に留まりがちな学問を生活の現場に引き戻すことで、学問そのものが豊かになれる可能性を提示した。事例に登場する人々の多くはノーベル賞という言葉さえ知らず、黙々と身の回りの天然資源を管理してきた。試行錯誤の歴史を紡いできた現場の民こそ、今回の共同受賞者といつてもよい。